

## [報告]

佐賀県の高等学校保健体育関係教員における  
献血思想の認識度調査結果佐賀県赤十字血液センター<sup>1)</sup>, 佐賀県薬務課<sup>2)</sup>吉村博之<sup>1)</sup>, 藤崎美由紀<sup>1)</sup>, 稲富鈴子<sup>1)</sup>, 江頭重博<sup>1)</sup>, 佐川公矯<sup>1)</sup>,  
吉原崇晋<sup>2)</sup>, 土師将裕<sup>2)</sup>, 筒井 寿<sup>2)</sup>, 山下貞幸<sup>2)</sup>, 公門 勉<sup>2)</sup>Recognition of blood donation practice by high school teachers of  
health and physical education in Saga prefecture*Saga Red Cross Blood Center<sup>1)</sup>,**Pharmaceutical Division, Saga Prefectural Local Government<sup>2)</sup>*Hiroyuki Yoshimura<sup>1)</sup>, Miyuki Fujisaki<sup>1)</sup>, Reiko Inadomi<sup>1)</sup>, Sigehiro Egashira<sup>1)</sup>,  
Kimitaka Sagawa<sup>1)</sup>, Takayuki Yoshihara<sup>2)</sup>, Masahiro Haji<sup>2)</sup>, Hisashi Tsutsui<sup>2)</sup>,  
Sadayuki Yamashita<sup>2)</sup> and Tsutomu Kumon<sup>2)</sup>

## 抄 録

若年層の献血者が年々減少するなか、若年層への献血に関する推進啓発は喫緊の課題となっている。

佐賀県では佐賀県薬務課と佐賀県赤十字血液センターが共同で、高校生の保健体育等の教育に携わる教職員に対し、血液事業の現状と献血の必要性について、より一層の理解を深めてもらい、生徒に対しての献血セミナーや学校献血等の献血に触れ合う機会の必要性を再認識していただくことを目的として、高等学校関係者向け講習会を開催した。講習会では、参加した教職員に対して「高等学校における献血事業取り組みに関するアンケート調査」への回答を依頼した。その回答から、行政および佐賀県赤十字血液センターから学校側へのアプローチ不足や、「授業に支障が出るため、時間の確保ができない」、「保護者の理解が得られない」など、学校側が抱える多くの問題を再確認することができた。このような問題点を認識した上で、献血セミナーや学校献血等の推進啓発に結びつけることが今後の課題である。

Key words: blood donation practice, blood donation in younger generation,  
high school teacher, collaboration with local government

## はじめに

少子高齢社会を迎え若年層の献血者が年々減少するなか、献血者の安定的確保には高校生を含めた若年層に対して学内での献血に関する推進啓発が有効な手段と考えられている。しかし、学内へ

の受入れ承諾がもらえないなど大きな課題もかかえている。

若年層の推進啓発については、行政でも2009年7月に文部科学省 高等学校学習指導要領 保健体育編に「献血制度」について記載し<sup>1)</sup>、2010年

11月には厚生労働省が若年層の献血者増加の達成目標を示した<sup>2)</sup>。さらに2012年2月には、厚生労働省は「学校における献血に触れ合う機会の受け入れについて」を通知<sup>3)</sup>するなど高等学校および高校生への啓発を行っている。しかし、佐賀県における2013年度の実績は、高校献血セミナー6校、高校献血の受入れ4校5回の実施に留まっている。このような現状から、高校生の保健体育等の教育に携わる教職員に対し血液事業の現状と献血の必要性について、より一層の理解を深めてもらい、生徒に対しての献血セミナーや学校献血等の献血に触れ合う機会の必要性を再認識していただく必要があると考えられた。

そこで、佐賀県業務課と佐賀県赤十字血液センターが共同で、「高等学校における血液事業取り組みに関する講習会」を開催した。この講習会は、厚生労働省の「2013年度献血に関する高等学校関係者向け講習会」の委託を受け、2013年12月に、佐賀県業務課が県健康福祉本部長名で、県内各高等学校長あて保健体育教諭等の出席を依頼した。その折に、参加した教職員に対して「高等学校における献血事業取り組みに関するアンケート」を実施し、今後の高等学校献血や献血セミナー等の実施に向けて有用な情報を得たので報告する。

## 方 法

今回の「高等学校における血液事業取り組みに関する講習会」には、54校中22校23名の教職員(校長1名・教頭4名・教諭9名・養護教諭主事6名・不明3名)の参加が得られた。まず、「佐賀県の血液事業の現状」について、献血の仕組みと若年層献血の推進を中心に、佐賀県赤十字血液センター献血係長が説明し、その後、小児がんによって7歳で生涯をとじた我が子の闘病記を母親が、命の大切さ、輸血を受けながら有意義な時間を過ごせたことについて「輝いた命の時間をありがとう」と題する特別講演を行った。最後に参加22校の教職員に対し佐賀県業務課が準備した、「高等学校における献血事業取り組みに関するアンケート」として、1. 回答者自身の献血経験や献血に関する考え、2. 献血に関する学習の取り組み状況、3. 献血に関する教育の必要性、4. その他意見、

要望、提案など、を選択式・記述式による調査を行った。

なお、本アンケートは、講習会の会場で依頼し、参加22校中21校から回答を得た。また、本アンケートは、参加した教職員が回答したものであり、学校長による高等学校としての回答ではない。

## 結 果

アンケート調査の結果は表1に示した。

回答者21名中18名が献血の経験者であった。献血に関するイメージは「社会貢献ができる」「ボランティアである」「献血について不安はない」など好印象を持っている割合が高かった。一方では、「献血について時間がかかる」「痛い」などの回答もあった。

自校での献血等に関する授業の実施状況は回答18校中5校(27.8%)であった。高等学校学習指導要領解説に「献血制度」が記載されていることを認識していたのは9校(42.8%)であった。厚生労働省の「HOP STEP JUMP」を授業で使用している高校はなく、57.1%の高校で生徒への配布や保健室においているに留まっていた。

献血教育について「高校ですべき」との回答が、20校(95.2%)を占め、その必要性に関する認識は高かった。しかし高校献血等を実施する上で、「時間の確保」、「保護者の理解」、「学校としての理解」、「準備等の負担」など多くの問題も指摘された。

自由意見では、高校献血等実施に関する問題点、高校献血等の啓発、高校献血に関する確認等、今回の講習会に関する感想等が挙げられた。

## 考 察

このような講習会は、佐賀県では初めての実施であり高等学校の教職員から生の声を聞くことができた。

アンケート結果からは、献血に関する教育や献血の必要性の認識度は高く、21校中20校が教育に取り入れるべきと回答した。これに対して、行政および佐賀県赤十字血液センターから学校側へのアプローチ不足が感じられた。一方、「授業に支障が出るため、時間の確保ができない」、「保護

者の理解が得られない」, など問題も再確認できた。松坂も, 献血セミナーによって, セミナーの前40%であった献血の意思表明が78%に上がったというアンケートを紹介している。さらに松坂は, ゆとり教育の見直しによる出前講座実施が減少したことも述べており, 今回の結果と一致している<sup>4)～6)</sup>。

また, 問9にある「2009の高等学校学習指導要領解説の献血制度についての記載を知っている」と答えたのが21校中9校, 「自校での献血に関する授業の実施は」5校に留まっている。さらに厚生労働省が作成配布している「HOP STEP JUMPについての授業での使用校」は0校, 「生徒へ配布のみ」が11校であることから, 指導要領の認識および資料活用が低く, 行政からの要請が十分に学校現場で浸透していないことが伺われる。

今回の講習会の日程については, 教育委員会との調整を行ったが, 学校行事の多忙により終業式の日に開催することとなった。結果, 参加校が

54校中22校と低かったのが反省点である。今後は, 行政および血液センターが連携し, アンケートにある意見, 要望, 提案を参考として, 教育機関, 保護者会, 教育委員会, 校長会等あらゆる方面に働きかけて, 「献血セミナー」や「学校献血」を推進する必要がある。このように, 今回の講習会で, 多くの意見, 提案を得ることができたことから, このような試みを繰り返し実施することで問題点を整理解決し, さらに教育機関との連携を高め, 若年層の献血推進に繋げていきたい。

### 謝 辞

本調査の内容は, 佐賀県が厚生労働省から「2013年度献血に関する高等学校関係者向け講習会」の委託を受けて開催した, 同講習会の折に実施した「高等学校における献血事業取り組みに関するアンケート」によるものであり, 使用の承諾をいただいた厚生労働省に対して感謝申し上げる。

表1 「高等学校における献血事業取り組みに関するアンケート」の内容ならびに集計結果  
(参加22校中21校から回答が得られた)

#### 1. 回答者自身の献血経験や献血に関する考えについて

【問1】献血をしたことがありますか。

	回答数
はい	18
いいえ	3

【問2】今まで, 約何回献血をしたことがありますか。(問1で「ア: はい」と回答した先生が対象)

	回答数
ア. 1～10回	14
イ. 11～20回	2
ウ. 21回以上	2

【問3】献血をしたことがない理由についてお聞かせください。(問1で「イ: いいえ」と回答した先生が対象)

	回答数
ア. 忙しくて献血する時間が取れない	0
イ. とくに理由はない	1
ウ. その他	2※

※1) 血液に問題あり

2) 現状をよく知らなかったため

【問4】献血に関して、どのようなイメージをお持ちですか。(複数回答可)

	回答数
ア. 社会貢献できる	18
イ. ボランティア	9
ウ. 痛い	1
エ. 面倒	2
オ. とくになし	0
カ. その他	1※

※1)健康チェック

【問5】献血で不安なことがありますか。(複数回答可)

	回答数
ア. 献血をすると体調を壊すイメージがある。	0
イ. ボランティア	2
ウ. 痛いイメージがある	5
エ. 時間がかかる	8
オ. 不安はない	10
カ. その他	0

【問6】献血に対する知識はどのように習得されましたか。(複数回答可)

	回答数
ア. 学生時代の学校授業	4
イ. 独学	1
ウ. とくにない	11
エ. その他	5※

※1)学生時代友人たちが定期的に行っている話を聞いていた

2)テレビのニュースなどで

3)講演等

4)大学時代友人に誘われて

5)パンフレット・TVのCM

【問7】献血された血液はどのように使用されていると思いますか。(複数回答可)

	回答数
ア. 交通事故時等の大量出血	14
イ. 手術時(病気の治療)	21
ウ. その他	6※

※1)疾病治療

2)血液製剤の原料

3)成分を利用

4)抗がん剤の副作用による血小板の低下時など

5)今日のお話で主にがん患者の方に使われていることを知りました。

## 2. 献血に関する学習の取り組み状況について

【問8】自校で献血等の授業が行われていますか。

	回答数
ア. はい	5
イ. いいえ	13

【問9】平成21年に高等学校学習指導要領解説に「献血制度」について記載されたことを知っていますか。

	回答数
ア. はい	9
イ. いいえ	12

【問10】厚生労働省から、献血について書かれている「HOP STEP JUMP」を、各高等学校に配布していることを知っていますか。

	回答数
ア. はい	13
イ. いいえ	8

【問11】厚生労働省から献血について書かれている「HOP STEP JUMP」をどのように使用されていますか。

	回答数
ア. 授業時に使用している	0
イ. 生徒に配布しているのみ	11
ウ. 使用していない	0
エ. その他	2※

※1) わかりません

2) 保健室においている

### 3. 献血に関する教育の必要性について

【問12】高校3年間で、献血のことを生徒へ教えるべきだと思いますか。

	回答数
ア. 教えるべき	20
イ. 教えなくてもよい	1

【問13】高校3年間で、献血のことを教えなくてもよいと思われる理由について教えてください。(複数回答可)

	回答数
ア. そもそも高校生に献血のことを教える必要はない	0
イ. 授業等の時間を割いてまで献血のことを教える時間を確保する必要はない	1
ウ. その他	0

【問14】高校3年間で、献血のことを教える時間を確保することは可能でしょうか。

	回答数
ア. 可能である	12
イ. 問題を解決できれば可能である	9
ウ. 不可能である	0

【問15】献血のことを教える時間を確保するうえで、支障となることはどのようなことでしょうか。(複数回答可)

	回答数
ア. 授業に支障が出るため、時間の確保ができない	8
イ. 教えるための準備等に、新たな負担が生じる	5
ウ. 学校内の理解体制が不十分である	7
エ. 保護者の理解が得られない	6
オ. 献血を行った時の生徒の健康が心配である	5
カ. その他	4※

※1) 誰が取り組むか 保健体育の授業の一環で行うのか検討が必要、毎年全校生徒に行うのはどうかと思う  
3年に1度でもよい

2) 支障になるとは思わない

3) 献血のことを教える時間はロングホームルームを使えば支障はないと思う

4) 「献血」に特化した授業は難しいかもしれない

【問16】自校で、「献血バス」を受け入れていただくことは可能でしょうか。

	回答数
ア. 可能である	5
イ. 問題を解決できれば可能である	15
ウ. 不可能である	0

【問17】「献血バス」を受け入れるうえで支障となることは、どのようなことですか。(複数回答可)

	回答数
ア. 授業に支障がでるため、時間の確保ができない	9
イ. 教えるための準備等に新たな負担が生じる	2
ウ. 学校内の体制が不十分である	7
エ. 保護者の理解を得られない	7
オ. 献血を行った時の生徒の健康が心配である	9
カ. その他	8

〈他の意見〉

- 1) 授業があっている時はできない。
- 2) 校内で検討する必要がある。
- 3) 高校生と保護者との間で、献血そのものでなく献血をする行為に認識のズレが生じていることもある。
- 4) 支障になるとは思わない。
- 5) 本校では、生徒が月2回、日曜日にスクーリングのために登校しているが、その時間内に献血に当てられる時間が限られているため。
- 6) 保護者の理解を得られたとして、献血を生徒の希望で行ったとして、万が一何か起きたときの苦情はどう解決するのかと言われたことがある。
- 7) とくにありませんが、時期が2月～3月が望ましい。部活や3年生のためには冬季がよい。

#### 4. 自由意見

【問18】今後、高校生の献血推進のために必要な、ご意見、ご要望、ご提案などがございましたら、自由にお書きください。

##### 1) 「高校献血等実施に関する問題点」

- ① 時間の確保が難しいと思います。
- ② 学校の献血ではなく、高校生に献血をしに行くように推進するようにはできないのでしょうか？  
学校での献血に問題(トラブル)が生じることもある。
- ③ 学校内で献血を行うと「何か」あった時の保護者対応が大変な場合が出てくると思います。「何か」が大きな問題でなくとも、大問題にされる保護者がたくさんいる。
- ④ 献血バスを入れるために保護者の同意を得るなどの困難はクリアできないと思うが、先頃のHIV感染の問題などをきくと高校生の性の低年齢化の問題が大きい。

##### 2) 「高校献血等の啓発」

- ① 学校教育課、健康増進課と連携をとる。
- ② 校長会でも取り上げていただくと動きやすいと思います。
- ③ 教科書に導入(視覚的教育)文字では伝わらない。
- ④ 献血はボランティアであり、障害のある生徒がみじめな気持ちにならない配慮が必要。
- ⑤ 血液のできるしくみをもり込むことで献血により自己の血液製造の促進にもつながる。
- ⑥ 現状では保健体育の教員以外で、献血に関する学習を担当するのが難しいので、今回の講習会の内容をHPで公開し、献血に関する学習を推進するのがいいと思う。
- ⑦ 献血について関心はあるものの、機会が得られないでいる生徒もいると思う。
- ⑧ 学校での授業(献血教室)や卒業献血がきっかけになるといい。
- ⑨ 命の大切さなどを正面からうったえるような講演をぜひ続けてほしいと思います。

##### 3) 「高校献血に関する確認等」

- ① 以前かなり前20～30年前、自校にも献血バスが来ていましたが、どういう理由で廃止されたのかわかりません。
- ② 現在学校で献血されている学校はどの時間帯でしょうか？

##### 4) 「今回の講習会に関する感想等」

- ① 昨年は本校にて献血教室を行って頂きました。
- ② 本日の講演ありがとうございました。大切なことを、ありがとうございました。
- ③ 本校では2,3年生に協力してもらっています。毎年御苦勞様です。
- ④ 特別講演には心をゆさぶられました。
- ⑤ あなた方の献血推進のための活動が目に見えない。

---

## 文 献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編 献血制度，2009.7
- 2) 厚生労働省：献血に係る新たな中期計画について～献血推進2014～，2010.11
- 3) 厚生労働省：学校における献血に触れ合う機会の受け入れについて(依頼)，2013.2
- 4) 松坂俊光，ほか：献血啓発としての学校出前講座の実践とその意義，血液事業，34：605-611，2012
- 5) 松坂俊光：我が国の献血の現状と課題，日本輸血細胞治療学会誌，59：725-732，2013
- 6) 松坂俊光：少子高齢化に伴う献血血液の相対的不足に対する方策について，日本輸血細胞治療学会誌，59：826-831，2013